



水木祥子 Shoko Mizuki

財団法人ひろしま美術館 学芸員
(2001年3月 社会科学研究科博士課程前期修了)



—仕事内容ややりがい—

所蔵作品の管理と研究の業務がありますが、普段は特別展の準備が主な仕事です。特別展では、まずテーマを決めて展示作品をリストアップし、国内外の美術館に貸し出し交渉を行います。作品が決まれば、ポスターやカタログを作ります。作品は開催直前に収集し、国内はトラックに学芸員が同乗して、集荷にも行きます。私も先日、十数時間かけて名古屋から帰ってきました。展覧会が始まると、講演会を開催したりお客さまとギャラリートークをしたり、仕事は多岐にわたります。終了後、傷がつかなかったかチェックし作品を返すと、やっと一息つけます。

常に2・3本の企画を抱えているので、のんびりはしてられません。でも展覧会を一から作っていくのは、すごく面白いやりがいがあります。

—学芸員になろうと思ったきっかけ—

小さいころから、母とよく美術館に来ていたので親しみがあったし、雰囲気もいいので、もともと好きな場所だったんです。高校生のときに、美術館で展覧会の企画ができる学芸員という仕事があると知り、裏方の仕事だけど面白そうだなと思って目指すようになりました。

学芸員が採用人数の少ない狭き門であることは知っていましたが、なるためには何をすれば良いかを常に考えてい

—できるだけことをして就いた仕事。いつか展覧会を企画し、一からつくり上げたい。

ました。目指すからにはできるだけことをして、それで駄目だったらしょうがないと。だから目標がぶれることは、ありませんでした。

大学院生のときには、広島県立美術館でボランティアガイドもしました。学芸員は、講演会とかギャラリートークとか人前で話す機会があるので、慣れるのにちょうど良い機会だと思って。実は私、話すのが苦手なんです。今考えるといい経験になったと思います。

—これからの目標は？

展覧会の一部を企画したことはあるのですが、展覧会そのものを自分で一からつくり上げたことはまだないんです。いつか世界の絵本を集めて、そこに描かれた技法や原画などに注目した展覧会をやりたいです。一つの企画に、3年から5年の準備期間が必要だったりするので、実現はまだまだ先の話なんですけどね。



学芸員の7つ道具

—広大生にメッセージを！

広島県は、複数の美術館がある全国的にも恵まれた地域です。広大生は、キャンパスメンバーズ制度があり無料なので、ぜひ、ひろしま美術館に来てください。絵って分りにくいイメージがあるかもしれないけど、好きか嫌いかで見てもいいんじゃないかな。1点1点見なくても、一通りざっと見てから、好きな絵だけをじっくり見るのも一つの手ですよ。

社会の第一線で活躍している先輩たちの職場を訪ねて、突撃インタビュー。仕事のことから学生時代に身に付けておくべきこと、はたまたプライベートの話まで、私たち学生の素朴な疑問・質問にお答えいただきました。

羅針盤 O B & O G 紹介

compass

—現在の会社に就職したのは？

「社会貢献できる技術者になりたい」というのが一番の理由です。電気は、生活に不可欠で、すべての産業の基盤になるものなので、社会貢献につながる仕事だと思ったからです。大学で、電力システムの運用、計画、解析、制御に関する研究を行っていたことも理由の一つです。電力系統という、日本中をつなぐ大規模で複雑なシステムの中には、とても高度な知識や技術が詰まっていることを知り、面白そうだと思いました。

また供給制度の規制緩和が進む電力自由化時代に、そこで働くことにもやりがいを感じました。

—現在の仕事内容ややりがい—

当社の一番の使命は、安定した電力をお客さまに提供することです。送電課では、発電所でつくった電気を地域に送る送電線と、それをつなぐ鉄塔の保守管理をしています。送電線に異常があると広い地域で停電が起こるため、点検でいかに早く異常を見つけて事故を防ぐかが重要です。送電課の人数は限られているので、点検業務の多くは外



注しています。どういう点検方法が良いか、予算はいくらかかるのかを算出して、発注した後は、打ち合わせや工事立会をしながら、請負会社の方と協力して工事を完成させます。

学生のときは、電力系統の需給運用をする部署で働きたいと思っていたのですが、やはり社会人って、全

田中雅英 Masahide Tanaka

中国電力株式会社 流通事業本部 広島電力所 送電課
(2007年3月 工学研究科博士課程前期修了)

—電気という「ついて当たり前」を支えながら、新しいことにもチャレンジしたい。

部自分の希望どおりにはいかないですね。でも今は、送電課の仕事がすごく楽しいですよ。実際に設備の異常を見つけたときは、やりがいを感じます。

—逆に大変なことは？

外部の方々とも協力しながら一緒に仕事をしていますが、会社に入ってまだ2年目なので、ほとんどの方が知識も年齢も私より上です。きちんと説明し、指示どおりに工事をしていただくには、多くの知識が必要で、それだけ勉強しないといけないので大変です。

社会人になりたてのころは、分からないことだらけでした。分からないままに終わらせようとして、周りに迷惑をかけてしまったことがあります。そのとき上司に言われたのが「最初の1、2年は聞くことが仕事」。今は、事前に調べて、分からないことは聞くようにしています。そうすることで、仕事がスムーズに進みます。

—将来の目標は？

電力業界も競争時代を迎えており、現状維持ではいけません。社員のアイデアをすぐ採用してくれる会社なので、もっと知識や技術を身に付けて、今のやり方にとらわれない新しいことを提案できる技術者になりたいですね。

今の日本人にとって「電気はついて当たり前」ですが、そう思ってもらえることが、仕事のやりがいです。今後も、安定した電力を供給していきたいです。



取材を終えて



「私、話すのが苦手なんです」と言われていた水木さんですが、作品に込められた思いや美術館の特長について尋ねると、とても丁寧かつ熱心に話してくださったのが印象的でした。自分の好きなことを仕事にできることがどんなに幸せか、この取材を通して実感しました。学芸員になるという目標に、一途に突き進んできた水木さんの姿勢を見習いたいと思います。

取材・記事 / 文学部2年 河本 亜希



自分の目標をしっかりとっておられる田中さん。社会人の厳しさについて語られる一方で、仕事の話をするときの生き生きとした目が印象的でした。やりがいや面白さを感じながら、楽しく働いておられるのだなということが、とてもよく伝わってきました。私自身も大きな目標を持ち、楽しく働ける社会人になりたいなと思いました。

取材・記事 / 法学部3年 相原 真沙美